

テーマ：大規模な空間構造の計画と技術 - 新国立競技場をめぐる多様な視点

日時：12月8日（月）18:00 - 20:00
場所：A-Forum レモンIIビル 5階
フォーラム終了後懇親会（会費 2000円）

コーディネータ： 斎藤 公男（日本大学名誉教授）
パネリスト： 今村創平（千葉工業大学、建築家）
小澤雄樹（芝浦工業大学、構造家）
多田脩二（千葉工業大学、構造家）
廣石秀造（日本大学）
福島加津也（東京都市大学、建築家）

プログラム

18:00～	開会挨拶（斎藤公男）
18:10～19:20	パネリストによる話題提供
19:20～20:00	質疑応答・全体討論
20:00～	懇親会

参加予定者：

安達 功、安部 重孝、市田 幹郎、伊藤 誠三、大澤 隆、大竹 透、小野 潤一郎、加藤 詞史、
金田 勝徳、神田 順、楠川 邦輔、熊坂 まい、櫻井 優貴、佐藤 恵治、高橋 一正、高橋 寛和、
田川 英樹、谷口 尚範、中塚 雅晴、中野 義達、中村 伸、西尾 啓一、西川 直子、日向野 登、
保科 章、細澤 治、町田 有紀江、松永 直美、三輪 富成、森田 時雄、吉原 正、和田 章

大規模な空間構造の計画と技術

- 新国立競技場をめぐる多様な視点

齋藤 公男（日本大学名誉教授）

新国立競技場の「国際デザイン・コンクール」が実施されたのは2012年7月。Zaha Hadidが最優秀案に選ばれてから、既に2年が経過しようとしている。そしてフレームワーク設計から基本設計を経て、10月31日には新しい入札契約方式（ECI）によって実施設計段階での施工予定2社が特定された。

2013年9月の東京オリンピック開催決定と前後して景観問題等を中心とした議論が提起され、その後多くの建築家や市民による集会やシンポジウムが継続して行われてきた。一方建築学会では2013年秋のアーキテリング・デザイン（AND）展におけるテーマの1つに「新国立競技場めぐって」が設定され、国際デザインコンクールの最終候補作品のパネルおよびオリンピック競技場の模型が展示された。さらに2014年には新国立競技場に関連した次のような議論の場が企画された。

9/12 建築学会大会 PD - 「オリンピック競技施設の構造デザイン」

10/1 建築文化週間 - 「新国立競技場の議論から東京を考える」

11/14 構造デザインフォーラム×AND展2014（11/14～21）

「大空間建築の計画と技術」 - オリンピックとワールドカップをめぐるAND

特に3つ目の企画はこれまで多くの議論が専門家を中心にしてきたのに対して、次の世代を担う若い人達の目線から問題意識をもち、諸課題を考え得ることを意図している。したがって各大学の研究室を中心として調査・検討課題を設定し、学生によるプレゼンテーションと議論を行うものである。そして今回の第5回フォーラムはこの延長上にあり、エンジニアとアーキテクトが話題を共有し、さまざまな視点からの考察と議論をより深めたいと考えている。

参考資料：1

第20回構造デザインフォーラム

「オリンピックとワールドカップをめぐる大空間の構造デザイン」

中村 伸 (日本設計構造設計群)

概要

日本建築学会関東支部構造専門研究会 (WG-D) 主催の構造デザインフォーラムが11月15日 (15時～18時) に行われた。本フォーラムは1995年から始まり今年で20回目を迎えた。例年は若手構造家にスポットをあて、自らの設計作品をもとにデザイナーとのやりとりの中でのプロセス等を中心に議論する場であった。今年は20年という節目の年であったため、20周年企画として、「オリンピックとワールドカップをめぐる大空間の構造デザイン」と題して開催された。本企画は大空間建築を議論する際に、必要最低限の知識を共有することを目指して、9つの課題を設定し、社会人と学生が協働で調査・検討した結果を学生が中心となってプレゼンテーションが行われた。

発表内容

テーマ	研究室
オリンピックと FIFA ワールドカップ スタジアムの歴史	工学院大学 山下研究室
国内外コンペの諸相	日本大学 空間構造デザイン研究室
構造形態 (ドーム)	日本大学 空間構造デザイン研究室
構造形態 (スタジアム)	千葉工業大学 多田研究室、昭和女子大学 森部研究室
再生・改修	芝浦工業大学 小澤研究室
スタジアムの多目的利用	首都大学東京 高木研究室
大空間の環境技術	東京大学 大岡研究室、早稲田大学 ○○研究室 東京理科大学 井上研究室、首都大学 ○○研究室 日本大学 空間構造デザイン研究室
合理と象徴	東京都市大学 福島研究室
都市と大空間	千葉工業大学 今村研究室

まとめ

新国立競技場を意識した本企画は、学生によるプレゼンテーション後に、斎藤公男氏がモデレーターとなり、学生や指導教授との議論、更には会場からの質疑により、活発な意見交換会となった。今後、本フォーラムでの議論やパネル・模型の成果品が大空間建築を議論する際の基礎知識となることを期待する。最後に、大空間建築と密接の関係にある「構造デザインとは何か」を論じた斎藤公男氏の一文を紹介する。

“代々木国立競技場 (1946) からちょうど50年。かつて日本の復興シンボルとして世界に飛翔した名建築と同様、新国立競技場もまた21世紀の日本の向かうべき姿をアピールして欲しい。誰もがそう願っている。やればできたということではなく、どのようにそれを実現したか、その筋道を辿れる「物語」が望まれる。それを支えたいと多くの人が思っている。

東京オリンピック2020に向かうプロジェクトは、東北の復興や原子力問題、防災都市の構築や環境景観問題と切り離すことはできない。いままでも、そしてこれからも、日本が世界に誇れる言葉は MOTTAINAI と OMOTENASHI。その精神—Less is More—を体現する構造デザインを期待したい。

【参考文献：斎藤公男「新国立競技場をめぐる」鉄構技術2014.2】

参考資料：2

構造デザインフォーラム×AND展 2014 (11/14～21)

「大空間建築の計画と技術」－オリンピックとワールドカップをめぐるAND

